
山村での惨劇

鎌学 文芸部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山村での惨劇

【Nコード】

N0427D

【作者名】

鎌学 文芸部

【あらすじ】

ある探偵事務所で一人の男が紙面とにらみ合いをしている。その男の名は、神内仁、新羅凍矢を助手とする、名探偵だ。その名探偵のもとに舞い込んだた通の依頼状、さまざまな人間関係そして事件の行方は？ 助手の視点から見た、新感覚のミステリー。

神内 仁の推理小説第1話（前書き）

この作品は、ある小説に10ページほど出て来た話を元に自分なりに、アレンジしたものですので、事件の真相を知っている人がいるかもしれません。でもそのような人も、最後まで読んで頂ければ嬉しいです。

神内 仁の推理小説第1話

神内探偵事務所と書かれた看板のあるオフィスビルの一室で、妙な紙面とにらみ合っている男がいる。

この男の名は、神内 仁じんない 職業：探偵 好きなもの：ジェットコースター 嫌いなもの：渋滞 巷では少しずれてるけど、明るい名探偵と評判が良い男だ。

しかし彼は、そんな事は微塵も思っていない。

ちなみに、私は新羅にいらいら 凍矢とうやこの男の補佐兼雑用係といったところだ。

「とうやくくん、なんだいこの妙ちくりんな紙は？」唐突に呼びかけられる。

しかしこのようなことは散々やられてもう慣れてしまった。そこで私は、

「もちろん、依頼状ですよ。あなたのもとに暑中見舞いと年賀状のほかに手紙が届いた事がありますか？」と平然と答える。

「そうじゃなくってその中身！」珍しく依頼状が届いたのにつまらなさそうにしている。

「私は中身をみてもいいとあなたが言うまで手紙は見れないんだから答えられる分け、うわっ!？」突然手紙が顔に当たる。

「読んでいいよ」神内が言う。

そこには簡単にいうと、友人が最近おかしくて今にも自殺してしまいそうなので原因の調査と阻止をして下さい、というごくありふれた依頼状だった。

「仁、これどこがおかしいんだ？」

「馬鹿、凍矢は目がそんなに悪かったのか。ここのP・Sのところ、最近その友人が「悪魔」という言葉をよく言いますって書いてあるじゃん」

なるほど、いわれてみれば下のほうに、遠慮がちにそう書いてあ

る。

「そうですね・・・まあ今は暇だしやってみませんか？」

「ええ、怖いじゃん悪魔なんてさ。」

「ただっこのようなことを言う。」

（いい歳こいて、全く、仕方が無い。アレを使うか。）私は切り札を使うことにした。

「では、これまでに私が立て替えている、この事務所の維持費から、あなたの食費などの生活費を始めとした、この2ヶ月分の出費を今すぐ返せるんですね？」

これが私の最終手段、お金のことで脅す、するといつものように返事が返ってくるはずだった、しかし

「しょうがないなあ」仁があっさりと答えた。

「えっ？」私は自分の計画の失敗を悟った。

「本当に？本当に返せるの？」私の声に軽く狼狽の色が浮かぶ。

「ああしょうがないからな」仁が答える。

しかし、仁の様子が少し変だった。普段なら勝ち誇っているであろうその顔はどことなく悔しそうだった。

「どうしたんだ？」私が尋ねる。

「いや依頼状の返事どうやって書くのかな、って思ってたね。」

「！！」さすがに私も驚いた。

「依頼、受けないんじゃないの？」

「そんなこと僕が言ったかい？」仁が笑っている。

このとき自分がまんまとだまされたことに気付いた。つまり「返す」というのは、「お金を」ではなく、「依頼状の返事を」だったのだ。

「仁、だましたな？」私は口調を荒げて言う。

「まあまあ、軽いご愛嬌だよ。」仁は軽くやり過ぎす。

「まあ、一度やると言ったからには、本気でやってくださいな。」
言葉を失った私は最後の悪あがきをした。

~~~~~5日後~~~~~

~~~~~

神内探偵事務所に二人の客が来た。依頼人、轟とどろき 擢弥たくやその人と問題の「友人」の婚約者である、酒井さかい 美祢みねだった。

「だいたいのは、手紙で分かりましたが、少々解せないところがあるのです、もう一度話していただけませんか？」

「はい。僕と友人の篠田しのだ 恒助こつすけは、A大学の薬学科の4期生です」
詳しい話は省略するが、その友人の篠田が変わったのは、夏休みの課題の実験をした後、美弥との結婚が決まった、ちょうどそのときだそうだ。

「なるほど。で、篠田さんは今どこに？」

「篠田は今、A県にある、山奥の村に行っているそうです。」

その言葉を聞いていて神内の頭の中には一つの推理が完成していた。「仁、どう思う？」

「僕の推理が正しければ、篠田さんがそんな場所へ行った理由も分からなくはないよ。」

「！！」みんなの顔に驚きの色が宿る。

「で、その理由は？」

「いや、事が結構切迫しているから、あまり刺激されては困る。だから、理由は篠田さんが無事と分かってからにするよ。」
そういうと彼は、キーをとった。

「さて、現場へ行こうか」

「も、もうですか？」美弥が言う。

「事件は現場で起こっているんだ。この事務所においても解決はできないよ。それにこの事件は、あなた方の想像以上に、一刻を争っているんです。」

そういうと神内はみんなに外に出るようにつながした。

「さあ、みんな乗って」心なしか神内の声がうれしそうに聞こえる。みんなが乗り終えると神内は唐突にエンジンかけた。

「さうと、行こか。」神内が突然アクセルを踏む。

「な、」あり得ないことが起こったのだ。なんと普通車がウィリーをしたのだ。

「仁、ジェットコースターじゃないんだ。何度も言ってるだろ。」
新羅はもう慣れてしまっているようだった。

しかし、今日初めて神内の車に乗った二人はそうはいかなかった。
二人の会話に反応する余裕さえないようだ。それも当然、この車は
公道を100キロ近いスピードを出して走っているのだ。

「あのう、神内さん。もう少しスピードを落としていただけませ
んか？」轟が遠慮がちに聞く。

「あ、また後でね。」神内はあっさりとはぐらかした。

「仁！^{クライアント}依頼人が困ってんだろ！そのへんも仕事のうちだろ。」

「みんなして僕の仕事の邪魔をするつもりだね。」神内はいじけて
言う。

「どこが邪魔してるって言うんだ。」新羅は少し怒り気味にいう。

「僕の仕事づくめのスケジュールのオアシスなんだから、これをし
ないで大事な洞察力に損傷があつた。らどうするんだい？」神内は
もっともらしい言い訳をいってごまかそうとしている。

「もうその手には乗りませんよ。次のインターチェンジからは私が
運転しますね。」

「ダメ！凍矢が運転してたら日が暮れちゃうよ。」神内は反論した。
確かにこのスピードでもあと2〜3時間程度かかるし、一般の人が
まともに安全運転したら本当に日が暮れてしまう。

「くっ。今回だけですよ。」そういつていつも負けてしまう凍矢だ
った。

そうこうしている内に、車はA県に到達していた。

「あと30分ぐらいかな。」神内が言った。空はすでに赤く染まり
まわりの木々を幻想的に映しだしていた。

「ん？誰だろう、あんなところで何してるんだ？」神内が言った。

「！！あれは、篠田です。」

「そうね恒助さんね。」二人が同時に叫ぶ。

篠田も気付いたのか、こちらに振り向いた。すると、轟と美弥は車
を降りて駆け出していった。

「篠田！こんなところで、さあ僕と美弥さんといっしょに帰ろう。みんな心配してるんだぞ。」

「そうよ恒助さん！帰りましょう。」轟と美弥が説得する。

「轟・・・美弥さん・・・みんな・・・？」篠田は口を開いたが、目が虚ろだった。

「美弥さん、轟さん、離れて！」神内が叫ぶ。驚いて二人が一步退いた時、篠田がどこから取り出した短刀を、二人がいたところに振りぬいた。

「っ！！」二人がさらに退く。

「悪魔・・・悪魔を退治する」篠田が呟く。

「どうしたんだ篠田？何を言ってるんだ？」轟は友人に駆け寄ろうとした、が、

「来るな！」篠田が叫んだ。

「僕は悪魔を倒すまでこの村を離れる気はない！」そう言うと篠田はきびすを返して、向こうへ行ってしまった。

「こんな事をしていたら、朝になっちゃうよ。」神内がぼやいた。

「そうですね。明日、明るくなってからもう一度説得してみましよう。」私はそう提案した。

そして、私たちは近くにあった空き家で今後の事を話し合った。

「仁、おまえ言ったよな、篠田さんがどうしておかしくなったのかは分かったって。」私は神内を問いつめた。

「ああ確かに言った。」神内が答えた。

「じゃあ教えてくれないか？」私は神内に頼んだ。

「そうだな、この事はみんなが知っておかないと、後と響いてくるかも知れないな。」神内はそこで一呼吸おくと、話し始めた。

「僕の考えさえ正しければ、篠田さんがおかしくなったのは、二人が薬学科だったってのがキーワードだと思うんだ。二人の話を聞いて、おかしくなったのが、実験の後だったってところが結構気になつてたんだ。」

「まさか、篠田さんは？」私が尋ねた。

「間違いないと思うけど、薬物中毒だね。きっと薬品の棚に、麻薬的作用を催す薬品があったんだろうね。」神内が言った。

「そんな、篠田が薬物中毒なんて・・・」轟が愕然としながら言った。

「凍矢、A大学に問い合わせせて、実験のときに、そういう薬品がなかったかどうか確かめてくれ。」神内が私に言った。

私はすぐに携帯電話をとってA大学に問い合わせた。

「はい、はい、そうですか。では、間違いないんですね。はい、分かりました。夜分遅くにありがとうございます。」私は丁寧に答えた。そして神内に

「確かにそのとき、実験室の薬品がおいてある棚には幻覚作用を持つ薬品が置いてあったそうです。」

「それじゃあ、決まりだな。やっぱり篠田さんは薬物中毒だったんだ。」神内が言った。

「それにしても、この後どうやって篠田さんを説得しようかな？」神内が気楽そうに言った。

「薬物中毒者となると・・・キツイですね。」私はそう答えるしかなかった。

「でも、中毒と言っても、そんなに重傷って訳でもないみたいだし、2〜3日放っておけば、きっと元に戻れると思うよ。」神内が言った。

翌日、私は習慣のせいかな、早く起きた。しかしやる事が無かったので、持ってきていたラジオを聞くことにした。

「先日発生した、強力な台風11号は強い勢力を保ったまま、四国地方へ接近中です。最大瞬間風速は、53キロ、中心の気圧は・・・」

「ラジオの気象情報が耳に入ったとたん、私は、（そろそろ帰らないと、この山で足止めを食らってしまうかもしれない）と心のそこで思っていた。

「ふあゝあ、もう朝ですか？」轟が身を起こした。

「すいません、起こしてしまいましたか？」私は丁寧に尋ねた。

「いえ、気にしないで下さい。たまには早起きしてみるのも良いん

じゃないですか？」轟が言った。

「そうですね。私は基本的に朝は早いのでよくわかりませんが、私は正直に答えた。」

「そうですね。大変ですね。」轟は心の底から心配した口調で言った。

「ええ、仁よりも早く来て、仁が来る前に、紅茶の用意と、部屋の片づけをしないと、こっぴどく怒られちゃうんです。」

「仲がいいんですね。」いつから聴いていたのか、美弥が口をはさんだ。

「ええ、まあ、腐れ縁ですし。」私は苦笑する。

「もう、どのくらいになるんですか？」

「そうですね、小学校の頃からだから、もう17、8年になりますね。」

「まあ、そんなになるんですか？」美弥が驚く。

「といっても、今でも人員不足で、完璧に雑用係ですけどね。」私はまたしても苦笑した。

「でも、それだけ、信頼されているって事でしょう？」美弥が言った。なるほどそんな風に考えたことは無かった。

「っ、うん・・・」神内がうめいた。

「しまった、この話は、仁には内緒にしておいてください。」私は二人に言った。

「勿論です」

「任せてください」二人は答えた。

「ん、あれ？みんな起きてたの？」神内が言った。

「みんな、誰かさんと違って、早起きなんだよ。」私は寝起きできよとんとしている神内に皮肉を言った。

「じゃあ、仁も起きたことだし、篠田さんを説得しに行きましょうか。」私は張り切って言った。しかし、

「ねえね、凍く矢くくん。朝ご飯は？」神内が情けない声を出す。

「そうですね・・・」そういうと私は裏にある畑（荒地？）を覗い

た。

「裏に蕪とほうれん草がありましたけど、これで何か作りましょうか？」私はそういうとかばんの中から、調味料を取り出した。

「さうて、やりましようかね。」私はそういうとフライパンを取り出して、野菜炒めを作ろうとした。

「私も手伝いましょうか？」美弥が尋ねてきた。しかし

「別にかまいませんよ。ありがとうございます。」私は丁寧に断ると、油をフライパンにひいた。

「ん、いい臭いだ。」神内が待ち遠しそうに言った。

「はい、出来ましたよ。」私は小皿に野菜炒めを取り分けると、皆が用意した円卓の上に皿を置いた。

「ありあわせですから、あまり量は無いけど、味には自信があるので、是非どうぞ。」私はとりあえずそう言って、箸を全員分あるか確認して、それぞれの前においていった。

「いったただつきまゝす。」という神内の掛け声と共に、朝ご飯は始まった。

そしてすぐに、「うまい！」「ほんと、美味しいです！」「などといった褒め言葉が宙を舞って、私の耳に届いた。

「お口にあつたようで何よりです。」私はいつものように、丁寧に返事をした

（とりあえず気に入ってもらったようだ）私は当初の自信のことを忘れ、ホツと胸をなでおろした。

「ぶはっ。凍矢君も腕を上げたね。」神内が上から目線で言った。

「ほとんどあなたのために始めたような物ですからね。」私はまた皮肉を言った。

「どういうことですか？」美弥が聞いた。

「この人は、探偵としては非常に腕利きですが、私生活に関しては、私がいらないと何も出来ないんです。」

「じゃあ、仕事外的时候はどうしてるんですか？一緒に暮らせるわけでもないでしょう？」美弥が聞く。（この人は結構鋭い質問を

するな)私は一瞬のうちにプロファイリングをした。これは私が唯一、神内に勝つことが出来る、探偵としての能力だった。(神内も得意なんだが、私ほど早くはない。)

「ええ、まあ。同じマンションに住んでるんですよ。仁が4階で、私はその真下です。」

「そうですか。助手というのは大変な仕事ですね。」美弥が心配する。(ん?このフレーズさっきの状況と似てないか?)そして考えること数秒、私は確信した。(そうか、美弥さんも余計な気を使わなくていいのに)美弥さんは、気を利かせて、さっきの会話の内容特に神内が私を信頼している、というところを、本人に言わせようとしているのだ。そこで私は、口裏を合わせつつ、話をずらすことにした。美弥さんなら、私が話をずらすようとしているとわかった時点で、あきらめるはずだ。

「そうですね。夜は上から不信な音が聞こえるし」(ぎくっ!)
「朝、たたき起こして、ご飯の準備するのも私ですし」(ぎくぎくっ!)

「事務所に行くとき車を運転するのも私ですし、郵便物の有無の確認は私なのに、内容は依頼者がくるまでわからないし、ほんとにもう、何でこんな自己中人が、探偵なんて因果な商売出来るのか、私は不思議でなりませんね。」(ぐさっ!)最後の一言が神内にとどめの一撃をさした。

「凍矢君、そこまで言うなんて・・・」神内が何か言いかけるが、私は

「自分の失態の結果です。これ以上言われなくなかったら、おとなしく、常人並みの生活が出来るよう、努力してください!」と言って、縮んでしまった神内に、追い討ちをかけたつ、遮った。

「あつ、もうこんな時間ですね、じゃあそろそろ篠田さんを探して说得しましょうか。」私はそう提案した。

「そうですね・・・始めましょうか・・・ハア」神内はよほどショックだったのか、最後に聞こえるか聞こえないかほどのため息をつ

いた。

そうして一行は、篠田を探すために、山を登って行った。そうして10分ほど登っていくと、少し開けた土地があり、そこは見事な段々畑になっていた。

「綺麗ですね」美弥が思わず感想を漏らす。無理は無い。これほどの土地に、見事なまでに等面積の畑に、余すところ無く、朝の日が当たり、（といってももう8時過ぎだが）畑が金色に染められた。「あっ、あそこに人がいる。ここの畑の人かな？」ただ一人、この美しさに感動していない人である、神内がのんきに言った。

「おまえ、空気読めよ。この素晴らしい光景を見て、何か言うことは？」私が説教をたれると、

「はあ？こんなん、ただ単に、この畑の植物の花粉や砂埃、空気中の塵や、水蒸気なんかに、光が反射して、金色に染まっているように見えるだけじゃっ、！！ブホッ！！」私はとりあえず、全く空気の読めない非常識人に、常識人代表として、渾身の一撃を、右ストリートに変換して繰り出し、そしてその一撃は、見事にこのうるさい男を黙らせるという務めを果たした。

「あなたにこの風景を理解していただくことと思ったこと自体が、間違っていた。」私は感情が言葉に表れるほど、深く意味をこめて言った。

「まあまあ、まずは目撃情報を捜すことにしようかな。」そういうと神内は、その畑の人に、事情を話し、情報を教えてもらおうとした。

「いや、精が出ますね、ところでおじさん、今日、この辺で僕ぐらの歳の男の人見ませんでした？」神内は馴れ馴れしそうに寄ってって、いきなり本題を突きつけた。

「僕の大学の友達が、ちよつと体調を崩しちゃって、寝かせておいたんだけど、逃げちゃったんだ。」

少し陰があって、身長は180センチぐらいじゃないかな？知ってる？」

「そうかそうか、それは大変だねえ。その男の人ならさつき、このさきの山小屋の近くで見かけたよ。」

もしかしたらまだいるんじゃないのかな？探してみるといい。「おじさんは親切にも教えてくれた。」

「ラッキーだったな。最初から目撃情報があるなんて。「神内は心のそこからそういった。」

「おじいさん、ありがとうございます。畑仕事頑張ってください！」神内はそう言って、情報通り、山小屋のほうへ向かった。

「ここが山小屋みたいだね。」神内が言った。

「そのようですね。今日は台風が接近してるので、さつさと説得して、さつさと帰ってしまいませんか？」私は神内に同意を求めようにして言った。

「あっ！あれ、篠田さんじゃないかな？」神内が返事をする前に、人影を見つけて叫んだ。

「そうです、篠田です」轟が言った。

「美弥さん、轟、また来てしまったのか。あれほど来てはいけないと言ったのに。まさか、君たちが悪魔の手先なのか？いや轟はともかく、美弥さんに限ってそんなことは無いはず。それとも美弥さんは悪魔の手先にたぶらかされて・・・ぶつぶつ・・・」

「なんか言いたい放題言われてません？」私は轟に、同情の念をこめて言った。（なんてったって、悪魔の手先で美弥さんをいいようにたぶらかして、以下略）

「っ、とりあえず、篠田！僕たちと一緒に来てくれ！」轟が言った。

「やっぱり貴様、悪魔の手先だな。僕にはれないように轟の面を被ったって、僕と轟の間には切っても切れないほどの強い絆があるんだ！貴様なんか騙されたりするものか！」

「今度は偽者扱いされてますよ。」私は今度は哀れみの念を込めて言った。

「しょうがない、篠田さんちょっと私と話しましょうか？」神内が言った。

(勝った) 私はそう思った。なぜなら、神内は説得に非常に長けているのだ。

「いいでしょう。あなたは怪しくなさそうだ。」篠田は警戒心を少しだけ解いて、神内と話し始めた。

「では、篠田さん、あなたの名前と住所、年齢、学校名を教えてください。」神内は最初に篠田の症状について調べようとしているようだ。

「私は篠田 恒助、住所は の××、 丁目です。年齢は21歳、A大学の薬学科の研究員の4期生です。」篠田はおとなしくそう答えた。

(そんなに末期的症状じゃないようだ。) 私はそんなことを考えつつ、神内の反応を待った。

「ふむ、分かりました。では篠田さん、あなたは……」そうして神内は篠田と世間話を始めた。

「……そして、実験中に薬物を吸って、中毒になってしまった人がいたそうですよ。」神内はそう言って、篠田の反応を待った。

「!!、あなたは、何者ですか?」篠田の目つきが変わった。

「私は一介の名探偵ですよ」「しっかりと「名」という文字を入れて、神内は自己アピールをした。

「そうですか。私もこの状態を自覚していて、全く大丈夫な時もあるれば、本当に悪魔が現実に出てくるほど、怖いくらい自分の深層意識を侵されるときもあります。でもそうなら全然自分を取り戻せないんです。」篠田はそこで言葉を切った

「それでも僕たちが君を見捨てると思ったか?僕が、美弥さんが、お前が勝手に目の前から消えるのを許すと思ってるのか?」轟が半分責めるような口調で言った。

「そうだな、でも、だからこそ、僕がこんなになってしまっても、君たちが僕を迎えに来てくれたとき、本当に嬉しかった。」篠田が心からの気持ちを込めて、そう言った。

「……っ!!」突然篠田が低い呻き声をあげて、表情が変

わった。

「くっ、！！あ、悪魔だ！」篠田が突然叫んだ。しかし、

「篠田、僕が分かるか？そこにいる彼女が分かるか？」轟が篠田の肩を掴んで揺さぶった。

「うわあああああ．．．！よせ、離してくれ、僕に触らないでくれ！」篠田は必死に抵抗している。しかし、この数日まともに生活していない人間が、たとえ同じ歳であっても、大学生に対抗するのは不可能な話だった。

「いいか、自分の心の根底にあるものを意識するんだ！お前は一人じゃない、それに悪魔なんかいないんだ、自分の心の弱さに負けてはいけない。自分を強く持つんだ！」轟はそう言っつて篠田を羽交い絞めにした。

「くっ、離してくれ、誰か、助けて！チクシヨウツ、！」そう言っつて口を閉ざすと、腰に差していたナイフに手をかけた。「っ！まさか轟さん、離れて！」私はそう叫んだ。しかし轟にはそのナイフの動きを知る術も無いため、剥き出しの腰に、篠田のナイフが刺さった。

「！！な、くっ、そんな．．．．．」轟はそう言っつて地に伏せてしまった。

「いやああああ．．．．．！！！！」美弥が悲鳴をあげる。

「美弥さん、見ないで！凍矢！」

「はい！」私はすばやく美弥さんを轟さんから遠ざけて、篠田さんと向き合った。

「出来ればこんなことはしたくなかった。でも．．．悪く思わないで下さい。これがお互いにとって今、一番いい方法なのですから。」
「そういうと私は篠田さんの傍らに歩み寄り、

「少し山小屋で休んでください。」と言っつて、一気にその無防備な腹部にボディーブローを叩き込んだ。

「うぐ！？」反応する間も無く、篠田も同じように地に伏せた。

「さて、轟さんをこちらに。ここで処置します。」そういうと私は、

かばんの中から包帯、サラシ、毛布などを取り出した（かばんのどこにしまっていたかは、永遠の謎、ということにしておいて欲しい）
「ここを晒して固定して、上から包帯を巻いて、後は毛布を掛けて暖かくしておけば」と、もう平気だと思えますよ」「私はそう言っ、腰を抜かしている美弥さんをひとまず安心させることにした。そしてその夜・・・

「そういえば篠田さんはどこだい？」神内が私に訊いた。

「確か近くの山小屋の中に放り込んでおきましたけど・・・まだ来ませんね。今日は台風がくるからみんなが近くにいたほうがいいのに。」私がそう言つと、神内がおもむろに立ち上がった。

「じゃあ凍矢くん、僕は君がほつたらかしにしてみました篠田さんを探してくるよ。」そして神内はドアから顔を出すと、

「うわあ、風が強いし、雨が降りそうだなあ。こんなん僕まで怪我したらどうしようかなあ。ねえ凍矢くん」神内はそう言つて私のほうを盗み見た。

「分かりました、私が行ってきます。」私はどうせこのままじゃ神内が篠田さんを探しに行かないということは分かりきっていたので、しようがなくそう言つた。

「おお！行つてくれるか！持つべき者は、やはり優秀な部下だね。」神内が言つたが、このセリフは私の頭の中で（おお！逝つてくれるか！持つべき物は、やはり言うことに逆らわない下僕だね！）と変換されてしまった。そしてレインコートを着て、懐中電灯を探していると、

「待つて私も行きます。」美弥が突然名乗りを挙げた。

「み、美弥さん！？」私は驚いた。

「これは危険なんですよ？」

「そんなこと分かっています。でも、私も何かしたいんです！ただ篠田さんが帰つてくるのを待つのは嫌なんです！」

「美弥さん・・・」その言葉を聞いて私の心が揺らいだ。私は（そうだろうな、何といつても婚約者だしな）と考えたが、

「私が責任を持って探してきましたから、待っていてくれませんか？」
というしかなかった。しかし、

「イヤです！私は篠田さんが失踪してから、ずっと待っていたんです！。轟さんは薬物中毒に薄々気づいていたようで責任を感じて、一人で探してくれていたんです。確かに私も手伝ったりしましたが、大まかなことはいつも轟さんがやってくれていました。」そこで美弥が一息おいた。私も神内も黙るしかなかった。

「でも今は轟さんが怪我をしまして、それに私はもうただ待っているのはもう嫌なんです！。私はもうさんざん待ちました。待って待つて・・・それでもまだ篠田さんは私たちのもとには帰ってきません。だから私は少しでも役に立ちたいんです！」美弥は堪えきれなくなった感情と共に、涙を流しながら私達に訴えた。

「お願いです。私にも篠田さんを探させてください。」

「ええ。私たちにあなたの言っていることを断る理由などありません。一緒に篠田さんを探しましょう。」私は穏やかにそう言った。「あ、ありがとう、とう。本当に、ありがとう。」美弥さんはそう言っ
てまた涙を流した。しかしこの涙は、先刻の感情的な涙ではなく、安堵と、これまで自分は役に立たないのではないだろうか、という不安の感情を溶かしてくれたことによる、歓喜にも近い感情からだった。

「じゃあ仁はここで轟さんの様子を見て。私と美弥さんは篠田さんを探しに行きます。」そう言っ
て私は準備を再開した。

「美弥さん、準備はいいですか？」私は訊いてみた。

「ちよつと待つてくださいこれを着てしまつたら・・・
はい！もう大丈夫です」

「じゃあ仁、行ってくるから」私はそう言っ
と、小屋のドアを開けた。

少し歩いているうちに、風が強くなってきた。

「美弥さん、この風じゃ分かれて探すのは危険だから一緒に探しましょう。私を見失わないようにして下さい。」私は彼女のほうを振

り返って言った。耳を澄ますと、風の中にかすかな返事が聞こえた。少し待っているとすぐに隣に追いついてきた。

「そうだ新羅さん、」美弥が言いかけると、

「凍矢でいいですよ。」私は普段苗字で呼ばれることが無いので、そりゃそうか、読みにくいし、名前のほうを呼んでもらうことにした。

「あ、はい、すみません。じゃあ言葉に甘えて凍矢さん」

「はい。なんですか？」私はこれから訊かれるであろう事を予測しようとしたが、できなかった。

「今朝のことなんですけど・・・二人ともやっぱり仲がいいんですね。」美弥が訊いてきたのはそのことだった。

「ええ、どうやらそうみたいです。私は今日はその辺に気を配って仁と接してみました、確かに仲がいいのかもしれない。」私はそう言うのと美弥の反応を待った。

「でも、神内さんは少し凍矢さんに甘えすぎてると思います。」美弥が厳しく言い放つ。

「はは、仁もそうまで言われるとなあ。あなたは今朝、私に言いましたね「信頼されているんですね？」って。」私は美弥に訊いた。

「はい。確かに訊きました。」

「あれはね、確かに私は信頼されているんですが、何よりも彼には、私以外の人間を基本的に信用することができないんです。」

「え！？それはどういう・・・？」

「彼は昔から非常に鋭い観点から物事を見ていました。だから皆が見えていない、物事や人の本質や隠された感情が見えてしまっていたんです。だから周りの人たちは彼を避けてしまっていたんです。私は昔から人の心の傷や悩み事を見抜くのに非常に長けていたが、それ故に私は周りに敬遠されている人への接触は得意でした。

そして彼から話を聞いた後に、私は彼に一つ提案をしました。」

「どんな提案ですか？」

「それは、その力を使って、困ってる人を助けたらどうか？という

ことです。私が困ってる人を見つけて、仁が解決する、そうすることとで、仁もだいぶまわりに溶け込めるようになっていきました。」

「それがあなた方の探偵稼業の始まりなんですね。」

「稼いではないから稼業ではないですけど、まあそういうことです。そしてある日、私は仁に夢を語ってもらいました。」

「何ですか？」

「私はこれほどの逸材が、どういう生き方をしたいのか、興味があったんです。」

「で、どんな夢なんですか？」

「それは、自分の力を使つて、できるだけ社会に貢献し、そしていつの日か、自分のように、はぶかれていた子供を助ける為の礎いしすえになりたい、というものでした。私はそれを聞いたとき決心しました。」

「一生この人についていこう。この人の言う社会の行く末を共に目指そう。」という気持ちになったんです。」

「それで助手を？」

「はい。しかしそれを「戯言だ」と言つて、私たちの決意を踏みにじつたのは、中学の担任でした。それ以来仁は、私以外の人を信用しなくなつたんです。」

「担任の先生が！？そんな・・・」美弥が驚く。後で分かったことなんだが、美弥は教育学部に入つていて、中学校の教師になりたかつたそうだ。

「確かに教師は私たち生徒が頼るべき存在です。しかしその教師全員が聖人なんてことは無いんです。所詮教師も人間なのだから。」

私は少し悲しさを覚えたが、それでも続けた。

「その事件は私たちにそのことを教えてくれた。私は人を頼つてばかりではいけないと、その時思つたのですが、やはり仁には別のことが見えていたようです。人を信じすぎたら、裏切られる、しかし人は一人では生きることができない。そして自分に必要なのは、自分のすべてを預けることができるという信用に足る人物だ、という事に気付いたんです。それが私には仁で、仁には私なんです。」そ

ここで私は言葉を切った。

「でも、私はそうは思いません。神内さんはあなたにも見せていない顔があるはずです。私は時々神内さんが一人で見ているのを見ると、普段見せないような、暗い影を宿しています。心のどこかで、まだ人を信用できていないんじゃないでしょうか？」美弥が言う。

「鋭いですね。私もそのことには気付いています。しかしそれは仁が自分で解決しなければならぬ問題ですから。私は仁があなた方を見て、これが改善されないかと、少し期待しているんですよ。」

「そうだったんですか」美弥がゆっくりと口を開く。

「ええ。おっ！あれじゃないかな？」私は前方にある山小屋を指差した。

「そうですね。篠田さん、いればいいけど・・・」

「いなかったら困るんですけどね・・・」私は苦笑した。

私たちはその山小屋に近づいた、すると少し物音が聞こえる。

「いるみたいですね。」

「ええ、しかもぴんぴんしてますよ、きつと。」私たちは顔を見合わせた。

「とりあえずノックをしてから・・・」私はそう言って篠田がいるであろうその扉の奥に向って、

「篠田さん私です、新羅です。」と言った。

「・・・」しかし返事は無かった。

「篠田さん開けますよ？いいですね？」私はそう言ってドアに手を掛けた。

そこにはちゃんと座った状態の篠田さんがいた。

「篠田さんさつきまであんなにどたばたしてたのに・・・どうしたんですか？」私が訊くと、

「この部屋の中を片付けていたんですよ。目も当てられないような状況でしたからね」篠田が答えた。

「今日一日だけはここにしようと思います。迷惑をかけますが、了承して下さい。考えたいことがあるんです。門は開けておきますん

で、明日の朝一番にあなた方の小屋に行こうと思ってます。」

「そうですね・・・いいでしょう。思う存分悩んでください。悩みつづけたら、その後答えが返ってきますよ。」私はそう言っただけで美弥に外に出るように促した。

「じゃ、明日の朝にまた会いましょう、篠田さん。」美弥はそう言っただけで外に出ようとしたが、

「すみません、轟は？あの後どうなったんですか？」篠田が心配そうに聞いた。

「ああ、傷自体は比較的浅かったんで、救急車は呼ばずに私がその場で応急処置をして、今は眠っていますよ。」私はこれで安心してくれるといい、と思いながら答えた。

「そうですね、それは良かったです。でもなぜ救急車を呼ばなかったんですか？」篠田は安心しつつ怪訝そうに訊いた。

「あの傷は刺し傷でしたから、救急車を呼んだら、警察に通報されてパトカーまで来てしまいますからね。仁が警察嫌いなんですよ。」

探偵は事件を解決するのが仕事だから、警察的権限、つまり、犯行現場に入ることが出来たり、警察と情報を共有したり、そういうことができないから仁は一回、警察の連中と言い争いをして、捕まらかけてるんですよ。」私は苦笑いしながらもそう言った。

「確かに探偵は警察ではありません。でも、警察が万能じゃないからこそ、警察が関与することができなくて困っている人がいるからこそ探偵なんです。しかし警察は探偵に頼ることを決してしない。事件に悩む人を前にして、プライドやメンツなど関係ないのに・・・。」

「そうですね、私もそれが正しいのだと思います。」美弥が言った。「ええ。確かにそうですね。探偵には警察と違って、依頼人のために仕事をする。しかし警察は、事件を解決するのが仕事だからそれ以上は何もしようとしない。事件を解決するだけなら、探偵や、いや、誰にだってできると言っても過言ではないと言えます。それほど警察は大きな権限をもっているのです。」篠田も賛成意見を上げ

た。

「しかし、それを理解できない人が余りにも多いのです。だから、私も仁も警察を全く信用していません。いや、同級生に一人警察になった奴がいるんですけど、そいつは信用できますね。だから理由あつて警察に行くときはそいつを仲介人にするんです。」私がそう言った直後に、強い風が吹いた。

「きやあつ!？」美弥が心底驚いたように叫び声を上げた。

「今揺れませんでした?」私は篠田に訊いた。

「ああ、この小屋は、段々畑にあつた小屋を大きくして、置きなおただけですから、たいした強度は無いはずですよ。大して固定もしていないそうですよ。」篠田が気楽に答えた。

「誰にですか?」私は少し強い口調で言った。(いけない、仁によく言ってる言葉は、仁に言うときと同じテンションで言ってしまう。)

「ああ、畑の人ですよ。」篠田がまたしても楽観的に言う。

「でも、固定していないって・・・そうとう危ないじゃないですか!」美弥が言う。きつと彼女頭には、この小屋が突風に煽られて倒れる映像が浮かんでいるのであろう。

「大丈夫大丈夫!今まで壊れずに建つてたんだから。それに見かけ以上に丈夫だよこの小屋は。」篠田が言うが、美弥はあまり信用していない。

「まあまあ、今日一日だけだし、それにさっき了承したでしょ?」篠田がなだめるように言う。

「しょうがない、美弥さん、そろそろ退きましようか?」私は美弥に立つよう促した。

「分かりました。」美弥が立ち上がる。

「それでは篠田さん、また明日。」私と美弥は篠田に一声掛けて、小屋を出た。

部屋の戸を閉めると強い風が身体を叩きつける、そして、少し歩いた頃、美弥が、

「篠田さん、大丈夫大丈夫、なんて言っただけ、本当に大丈夫なのかしら。」と心配そうに言った。

「そうですね、自分で言ってるんですから、大丈夫ですよ・・・きつと」私は多少楽観的に言ったが、少し残っている心配感を、表情と口調から拭い去ることができなかったようだ。

「心配、なんですね？」美弥に一瞬で気付かれてしまった。

「ええ、楽観的に言ってみました、彼の面影にはまだ影が宿っていました。こんなことなら仁も連れてくるんだった。」私はそう言いつつも、（流石に鋭いな、気をつけないと・・・情報が漏れると少し厄介だな。仁にも言っておかないとな。）などと考えていた。

「篠田さん確か、まだナイフ持ってましたよね。」美弥がまたしても心配そうに訊く。

「ええ、でもナイフでの自殺はそんなに簡単ではありません・・・でも、違う小屋となると、」私はそう言うしかなかった。

「しかし、まだ自殺すると決まったわけではないので・・・気楽に考えてください。気を張りつめると今日の夜ちゃんと寝れなくなってしまうですよ？」私はできるだけ気楽に振舞った。

「そう、ですね。うん、そうですね。考えていてもしょうがないですね。」美弥は少し元気になったが、私に、その心の奥にある心配の感情を隠すことはできなかった。しかし、私がちょっと分析してみると（これは、私に合わせている？しかも、強がりじゃない？何なんだ、割り切った考え方ができる人はいくらかいるがそうだとし、ても、ここまで自分の真意を隠せるものなのか？）といった、変わった言動ということしか分からなかった。しかし、（そうか、この人は心配こそしているが、篠田さんという人間を誰よりも知っていると、という自負を持って自殺はしないという確信を自分の中に作り出したのか！しかし、なんとと言う精神力だ、これほどまで自分の感情を捻じ伏せることができるなんて、並みの人間にできる技じゃない。）そんなことを考えている内に、私たちは小屋に到着していた。

「ただいま」私と美弥が二重奏で言った。

「お帰り〜」二重奏ではないものの、仁も返事をしてくれた。

「篠田さん、いた？」仁が私に訊く。

「ええ、ぴんぴんしてましたよ。それより轟さんは？」私が訊き返す。

「さつき、蘇生したよ。まあもう平気だろうね。」仁は私に答える、というよりも、美弥さんへの報告のようだった。

「仁、お前、どこにも行ってないだろうな？」私が詰問口調で言った。

「い、いや、どこにも、い、行ってないよ。何で？」

「！！どこへ行ったんだ？言え！」私は仁の嘘を一瞬で見抜き、問いただした。

「べ、別に、どこにも、行ってないよ？」仁は正直者（？）なので嘘をつくのが下手だ。（特に私に対しては。依頼人を納得させるには、どんな嘘でもあっさりといってしまう。こちらが「え、そんなことあったっけ？」などと思つてやっとならぬと気付く程度だ）

「どこだ？」私はさらに問い詰める。

「ちょっとそこまで、トイレに。」仁は目をそらしながら言う。

「ほ〜トイレですか？・・・じゃあなぜ目をそらすんですか！しっかり答えてください！」私はこれ以上言い訳はできないだろうと思つて最終手段を使った。

「あゝあ、せつかくこちらもいい情報を持って帰ってきたのに、仁は私たちに情報をくれないんですね？」私はできる限りイヤミに聞こえるように言った。すると仁は、美弥のほうを見て、本当なのか目で尋ねていた。しかし美弥は軽く首を縦に振って私に対する同意を示した。

「ま、そういうことならしょうがない。僕は轟さんが目覚めてから偵察がてら篠田さんの小屋とは違う方向へ行つてみたんですよ。そしたら、この段々畑の小屋は、固定されていないけど、妙に頑丈なことが分かったんだ。」仁が報告する。

「妙に？どうしてだ？」私は少し違和感を感じ、訊いてみた。

「固定されていないってことは、転倒の可能性があるんだ。大きな打撃を受ける可能性がある」と、その刺激を吸収する為に、脆く作ることが多いんだ。日本の車も、「車を壊して、人を生かす」って形をとっているんだ。つまり、車を壊すことで車体をマットにして、中にいる人にかかる力を少なくするってことなんだ。」仁が説明する。

「つまり、危険があるのにこんなに頑丈な作りかたはおかしいってことか？」私は説明を私なりに要約した。

「ザツツラ〜イト！」仁はおとなしく「正解」といえばいいものを、いちいち英語で言った。しかも、成績優秀だった仁なら、しっかりと「That's light!」という発音ができるはずなのに・・・。

「で、君たちの情報は？」仁がすぐさま訊いた。

「ん？ああ、そうか、えつと篠田さんは今日は帰らないで山小屋に泊まるみたいだよ。」私はそう言うのと仁の反応を確認しようとした。「ふ〜ん？それで？凍矢君、君は結局篠田さんを連れ戻せなかったんだね？」仁が痛いところを突いてきた。

「しょうがないだろ？篠田さんがどうしてもって言ったんだから。」私はとりあえず言い訳をした。すると案の定、

「そついうのを世間一般では、いい訳って言うんだよ。」という答えが返ってきた。

「自分の方がよく言い訳をするくせに。」私は言った。

「『人の振り見て我が振り直せ』って言葉を知っているかい？」常識的な事を聞く。もちろん人の振る舞いを見て注意する前に、自分の振る舞いを正せ、という事だ。（もちろん読者の皆さんは知っていますね？）

「そついう問題じゃありません。まったく、そついうところだけじゃなくて、もつと有益な事に頭を使ってください。」私はそう言うのと、仁に追い打ちをかけた。

「例えば、早いとこ篠田さんを連れ戻す方法を考えるとか・・・。」

私はしょうがないので、いやみを言っつて無理矢理反応を確かめようとした。

「うっ、確か君は自分で篠田さんを連れ戻しに行くつて言っつたんじやないか。」仁が抵抗した。

「いいえ、確かあなたは、“寒いのがイヤだから自分では篠田さんを連れ戻しに行かない”と言っつたはずですよ。」私は仁の悪あがきを封じた。

「く、仁は悔しそうにしている。(よし、勝つた!) 私は心の中で盛大にガッツポーズをした。

「あのくちよつといいですか?」美弥がおずおずと尋ねた。

「確かに神内さんが行きたくない、というようなことを言っつていましたが、最終的に、新羅さんが“自分が行く”つて言いましたよ。」美弥が仁を庇う発言をした。

「!!!」(しまった、この人は常人以上の『何か』を持つている。敵に回すのは・・・不利!) 私はそう考え、

「・・・そうでしたっけ?」と、とぼけることにした。しかし、「とぼけたつて無駄だよ。これで2対1だよ」仁が言っつた。(この小学生だよ) 私はそう思っつたが口には出さなかつた。

「ていうか、何の話だつたんだっけ?」私は話をはぐらかすことにした。

「確か、君がこの僕を脅そうとしたことから始まつたんだよ。だけど話はずらすものじやないよ。続けるものなんだ。」仁が言っつ。(くそつ、ダメだつたか) 私は最終手段を使っつた。

「でも、仁がそそのかしたんだろ?」私は最終手段『悪あがき』を始めた。

「いやいや、凍矢君が勝手に引き受けただよ。」仁が通常攻撃『悪あがき返し』を使っつた。

「いや仁が」「いや凍矢君が」「いや仁が」「いや凍矢君が」「仁が」「凍矢が」そうしてそのまま十分ぐらいこの醜い争いは続いた。(何て恥ずかしい)

翌日、私は静かな空気の中で目覚めた。

「ふう、美弥さんはまだ起きてないのか。・・・少し散歩でもしようかな。」私はそう呟くと、毛布から這いずり出て、皆を起こさないように扉を開けた。

「まさしく台風一過だな。」（そうは言っても・・・篠田さんちやんと来てくれるかな？）私が言葉とは裏腹にそんな事を考えていると、

「朝から散歩ですか、それもこんな早い時間に？」美弥が後ろから声をかけてきた。

「なんだ美弥さんですか、さすがに驚きましたよ。」私はまたしてもこの人の能力を思い知らされた。（読心術に、気配を消せるなんて）私は少し間を置いて、疑問をぶつけた。

「美弥さん、よく気づづかれずに後ろから声をかけましたね。どうやっただんですか？」私が訊くと美弥は笑って、

「細心の注意を払っていれば、このくらいはできます。」と言った。「でも仁はだませませんよ。」私は負け惜しみを言ったが、

「あら、私はだましてはいませんよ。ちょっと後ろから話しかけただけですよ。」美弥は笑って受け流した。

「まあ、似たようなものじゃないですか。」私はさらに悪あがきをした。

「ま、その話は置いておきましょう。少し歩きましょうか、折角の散歩ですし。」美弥はそう提案した。（何か裏があるな・・・篠田さんの事で）私はそう思っ、その提案に乗る事にした。

「そうですね、朝の時間は短いですからね。」私はそう言って歩き出した。

少し経って私は美弥さんに散歩の真意を聞いた。

「それで、何か私に訊きたい事があるんじゃないのですか？」私が丁寧に尋ねると、

「！！」美弥の顔に動揺の色が浮かんだ。

「よく分かりましたね」美弥はすぐに落ち着きを取り戻して、私の

目を鋭く見返してきた。

「あなたのように心を読める人は少なくない、ということですよ。」
私はそう言っ、本題に入った。

「そこまで分かっているのなら、最初から話す必要はなさそうですね。」美弥が言う。

「篠田さんはたぶん、実験中に中毒になったのではない、ということに関してですか？」私は今まで感じていた疑問を考えた上での答えを美弥に言ってみた。

「ええ、そこまで分かっているんですね。」美弥が感心したように言った。

「仁ならもつと早く気付いていたはずですけどね。」私は苦笑した。
「神内さんも気付いているんですか!？」美弥が驚いたように言った。

「勿論です。伊達に名探偵と呼ばれているわけじゃないんですよ。ま、私に言わせていただければ名探偵ではなく、迷探偵ですけどね。」私はそう言っ、自分の考えを美弥に話した。

「そうですね、まず、麻薬的な作用のある薬品が、大学生だからといって実験に使われたりすることは無い、と思っています・・・私的には。そして、誰かが篠田さんの薬品に何らかの薬物を混ぜた、と考えるのが無難でしょう。」私がそう言っどこからか、

「愉快犯の可能性は考えなかったのかな、凍矢君？」という、お気楽な、しかし鋭い声が聞こえた。

「仁、どこにいるんですか？」私はできるだけ平静を装っ、近くにいるはずの人物に問い掛けた。

「後ろだよ、後ろの木のよ。」確かに声は後方から聞こえる。

「じゃあさっさと降りてきてください。サルじゃあるまいし、恥ずかしいですよ。」私は言っ。

「悪いね。」ストツという小さな音を立てて仁が降りて（落ちて?）きた。（どうやったらかんなに軽がると降りてこられるんだろ?。）私がそう考えていると、

「で、さっきの答えは？」仁が訊いてくる。

「愉快犯云々のことですか？それなら簡単ですよ。愉快犯なら犯人は教授以外にいない！」私は自信を持ってそう言った。

「……………」二人の視線が冷たい気がする。（何か間違えたかな？）

「あのくよくく分からないんですけど。」美弥がおずおずと訊いてきた。

「僕には分かったけど、美弥さんにはしっかりと説明したほうがよさそうだね。」仁が私に言った。

「分かりました。まず、愉快犯には犯行の動機というものが、基本的にありません。そうになると、もっと簡単な方法を考えるはずですよ。」

「簡単な方法？」

「そう、大学の研究室や実験室の警備は意外と厳重で、薬物をくすねるなんて、そんなに簡単にできることはありません。」

「なるほど、だから薬の出し入れが自由にできる教授が犯人って訳か。」仁が納得したように言った。

「まあ、そういうことです。」私は少し胸を張って言った。

「でもね、仮にも教授だよ、社会的な地位も名誉もある人物が愉快犯になるとは考え難いよね。」仁が痛い指摘をしてきた。

「う、でも可能性が無いとは言いません。」私は食い下がった。「ま、そうだけど、可能性は結構薄いよ。もし仮に教授が犯人だとしたら、たぶん教授は確信犯だよ。」仁が指摘する。

「何でそう言い切れるんですか？」間違っていると認めたくなかった私は仁の考えを訊いてみることにした。

「勿論、そんな危険を冒してまで、薬物中毒にしようとするかな、そんなんだったら殺してしまうんじゃないかな、もし治っちゃったら犯人が分かっちゃうからね。だから、そんな愉快犯は有り得ないよって教授が犯人なら愉快犯ではなく、確信犯である。こんな感じでもいいかな、美弥さん？」仁がかっこよく私の意見を否定して、さ

らに美弥に感想まで訊いている。

「とてもよく分かりました。確かに、教授が優等生である篠田さんを薬物中毒にするには動機がありませんものね」美弥が感心して言う。

「それにしても来ませんね、朝早いうちに来ると思っていたけど、」仁が言う。

「ちょっと見に行ってみましょうか、美弥さんは轟さんについていてあげてください。」私はそう言うと、仁に来るように促した。

そして篠田さんが寝泊りしている山小屋の前についた。

「こつやつて見てみると、段々畑の上にあつたのに、あれほどの台風をよく耐えきったもんだ。」仁が感服していった。

「そうですね、さて、」私はそう言って、小屋のドアをノックした。トントントン………

「反応が無いですね、ちょっと入ってみましょうか？」私は仁に訊いてみた。

「ああ。早く入ろう。嫌な予感がする。」仁はそう言って、ドアに手を掛けた。重量感が溢れる木のドアで見るからに頑丈そのものである。そのドアが、

「開かない？」仁はドアに手を掛けて押しているが、体重をかけても（そんなに重たくはないが）開く気配は無い。

「おかしいですね、このドアには鍵はおるか、門すらないんですよ。」私はそう言うと両手にコブシを作り、腰に引いた。

「……はあつ、」腰に引いたコブシをドアに向って放つ。ピシッ！バキッ！！

嫌な音と共に、ドアが無理矢理開かれた。

「な、何てありさまだ、篠田さんは？」仁が言った。確かに部屋の中は、ポルターガイトが暴れまわったかのように、荷物が散乱している。その部屋の隅っこに彼はいた。腹にナイフを刺した状態で。

「篠田さん！？」私たちは駆け寄った。

「う、うううん……」頬を叩くと篠田が少しうめいた。

「良かった、生きてる。仁、早く美弥さんに連絡を取って、私のバッグを持ってきてもらってください一刻を争います。」私は矢継ぎ早に仁に指示を出した。

「分かった。すぐに連れてくる、凍矢、救急車はお前に任せたぞ。」仁も私に指示を出す。

「はい。」私は答えるすぐ、携帯電話を取り出した。ここは山奥だが、そこそこ人口が多いので、機種によっては電波が入るのだ。運良く私の携帯は電波が入るので、119番を押して、応答がくるまで待つ。

「はい、119番です。消防ですか、救急ですか？」男の人の落ち着いた声がある。私はすぐに、

「救急車を要請します。」と言った。

「分かりました、お所を教えてください。」男の声が返ってきた。

「この正確な地名はわかりませんが、A県の山奥の村で、段々畑があります。」私はそう言って、応答を待った。

「場所はわかりました。容態を教えてください。」さっきとは違う男の声が聞こえた。きつと救急隊員だろう。

「はい、刺し傷で意識レベルは2ケタですね、脈拍は正常、呼吸数は早めです。」私は状況をできるだけ正確に言った。(ちなみに、意識レベルとは、その人の意識を数値化して表す言い方で、2ケタとは、呼びかけに答こそしないが、少しうめいたりして反応する程度から、叩いたりつねったりすると少し反応をする程度である。)

「分かりました。刃物はまだ刺さっていますか？」隊員が訊く。

「出血の恐れがあるので、まだ刺してあります。」私はそう言った。刺し傷は、刺されたとしても、刃物が刺さっているかぎり、刃物が傷口をふさぐので、刺したままにするのが、最善とされている。

「はい。では、そちらで、できる限りの応急処置をして下さい。」隊員が言った。

「分かりました。」私は答えた。

少し待っていると仁が美弥を連れて戻ってきた。

「やっと来たか。早く私のバッグを、」私はそう言って、美弥からバッグを受け取った。

「えーと、あった。」私はそう言ってサラシを取り出した。

「サラシをどうするんだ？」仁が聞く。

「こうするんですよ。」私はそう言って、篠田の下半身にサラシを巻きつけていった。

「えっ？下半身をサラシでぐるぐる巻きに」美弥が驚いて言う。

ちょうど最後まで巻ききった頃、救急車のサイレンの音が聞こえた。「良かった、ちょうどいい時間だ。」私はそう言って、篠田の身体に毛布をかけて、担架に乗せる準備をした。するとすぐに二人の男が担架を持って入ってきた。

「救急のものです、患者はどこに？」入ってきた男が言った。

「ここです。」私はそう言って篠田の体を持ち上げて、担架に乗せられるようにした。

「すみません。おい、反対側、しっかり持ったか？よし、1、2、

3」掛け声と共に担架が持ち上がった。

「手際いいね、」仁が言った。

「そうですね、プロですから。どこそ誰かさんとは違いますよ。」私はいやみを言った。

「誰のことだい？」仁が殺気を込めて訊く。そして私が答えに詰まったその時、

「誰か付き添いの方来てください。」隊員が言った。

「じゃあ、私と美弥さんで乗ります。仁はしっかりと後ろから付いて来てくださいね。」私は後ろからという言葉に力を入れて仁に言った。

「分かったよ」仁が言うと、

「早くしてください。」隊員が急かす。

「じゃあ、轟さんをしっかりと連れてきてくださいね。」私はそう言って、救急車に乗り込んだ。

救急車の中ではもう、救急隊員たちが処置に取り掛かっていた。

「あ、来ましたね。それにしても、あなた、医療関係者ですか？あんなに適切な処置は、関係者でないとできませんよ？」隊員が私に訊いたので、私は、

「いいえ、私はただの探偵補佐です。それでも、今日における医療知識はしっかりと身に付けていますけどね。」私がそう言うと、

「いや、そんなのにしておくにはもったいないですよ。あんなに的確な通報から、応急処置まで。」隊員が言う。

「そういえば篠田さんの身体をサラシでぐるぐる巻きにしたのは何だったんですか？」美弥が訊く。

「ああ、あれですか。あれはショックパンツといって、戦時中に、急降下爆撃でパイロット達が、意識を失わないように、ショックパンツという服を発明したんです。」私はさらに説明を続ける。

「急降下爆撃をすると、強い圧力がかかるので、体の中の圧力を変えて、常に脳に血液が行くようにした、それがショックパンツなんです。そして今では、腹部などに大きなダメージを受けたりすると、能に血液が行くように、ショックパンツを使うことがあります。少しでも能へのダメージを減らす為にね。」私はそう言って説明を終えた。

「よく知ってますね。」隊員が感心して言う。

「ま、このぐらいの知識は、」私は言葉を濁していった。

「そろそろ病院に着きますよ。」隊員が言う。

「早いですね。」私は言った。山奥から運ばれたのにやけに早かったからだ。

「ああ、山の麓に病院があるんですよ。」隊員が言う。

「結構大きな総合病院で、手術設備から何から何までしっかり揃ってますよ。」隊員が人を安心させる一言を言う。

「じゃあ、篠田さんは助かるんですね？」美弥が言った。

「手術は必要ですが、きつと助かりますよ。あそこには凄腕の女外科医がいるそうですからね。それに応急処置が良かったし。」隊員が言う。

「おい、ポケットとしてんな。病院についたぞ。」運転手が言う。(運転手って言うのかな?)

「はい！ドア開きます。ストレッチャー用意して、」隊員がてきぱきという。

「ストレッチャーって何ですか？」美弥が訊く。

「簡単に言うと、病院などで使う、移動用の担架だよ。ほら、キャスターがついてて、高さが変わる担架、見たことありますよね？」私は言った。

「ああ、ドラマなんかで見たことがあります。」美弥が答える。

「そうでしょうね。」私が言う。

「さあ、病院の中に入りますよ。急ぎましょう。」私が美弥に言う
と、

「そうでしたね。行きましようか。」という答えが返ってきた。

(強い人だな。本当は胸が潰れるくらい心配している筈なのに。)私はそう考えながら病院の中に入った。

「すぐに手術に入るようです。手術室はこちらです。」ナースが案内してくれる。

「こちらのイスに座ってお待ちください。」そう言うとナースは廊下の向こうに言ってしまった。

「やっぱり、ドラマなんかと変わりませんね。ドラマだここに取り乱した親が、騒ぎながら祈ってるんですよね。」美弥が言うが、不安の色は隠せない。

「強がる必要は無いんですよ。しっかりと自分を保つことも大切ですが、ストレッチに感情を出すこともまた、大切なことなんですよ。」私が言ったが、

「篠田さんが頑張ってるのに、私はおろおろしてただけなんて、嫌ですからね。」美弥が言う。

「なるほど、しかし、そんなに気を詰めていると、体がもちませんよ。」私が注意する。

「そうですね。」美弥が答える。

そうして、時間が過ぎていった。

~~~~~2時間後~~~~~

手術室のランプが消えて、手術着を着た女医が出て来た。

「篠田さんの手術の執刀をしました、響<sup>ひびき</sup> 早野香<sup>さやか</sup>です。とりあえず手術は成功しました、しかしまだ油断はできません。当分はICUに入れて、様子を見ましょう。」

ICUというのは、集中治療室の略で、常に医者達の監視下にあるので、万が一、急変などがあっても、すぐに対処できるのである。

「そうですね、ありがとうございます」私と美弥が頭を下げる。

そして、篠田が手術を受けてから、4日が経とうとしていた。しかし篠田はいっこうに目を覚まさなかった。

「どうして手術が成功したのに目を覚まさないんですか？」美弥が詰問する。

「手術までに、相当な量の出血があったと思われる。そのため、能へのダメージは免れないかもしれませんが、それは意識が戻らないと・・・とにかく、意識が回復しないのは、多少なりと、何らかの形で、身体に大きな負担がかかっているでしょう。」早野香先生が言った。

「もう少し様子を見てみましょう。」私は美弥をなだめた。仁は手術の後見舞いに来た以外、病院に来ていない。

「こんなときに仁は何をしているんだ？」私の呟きは美弥さんに聞こえてしまったようだ。

「そうですね、でも何か篠田さんのためになるようなことをしてますよ、きつと」美弥が言う。

「そうだといいですね。」私はとりあえずそう言って、仁がいく可能性のある場所を考えた。

「ちよつといいですか、仁に電話をかけてみますね。」私はそう言って席を外した。

そして電話をかけてみると、

「仁です。今は電話に出ることができないんだ、とりあえず発信音の後にメッセージを入れてくれれば後で聞いてあげよう。ピーーピーー」なんとふざけた留守番メッセージだ。

「仁、私だ、見舞いにも来ないで、何をやってるんだ？とりあえず何をしているかだけでも教えてくれないか？」私はメッセージを残すと、携帯を閉じて、美弥の所へ戻った。

「どうでしたか？」美弥が訊く。

「留守番に繋がってしまいましたよ。」私はそう答えて、

「とりあえず明日まで待つてみましょうか？」と提案した。

「そうですね」美弥もそれほど乗り気ではなかったが、賛成した。そして1日が過ぎ、その夜も更けた頃。

(仁、何をやってるんだ？) 私が心の中で考えていると、病院の自動ドアが開く音がした。

「遅くなって悪いね凍矢くん。」神内 仁その人がドアのところに立っていた。

「仁！、今までどこにいたんだ？」私は感情を抑えきれず怒鳴ってしまった。

「静かにしろよ。ここは病院だぞ。」仁が言っても、いまいち説得力が無い。

「で、どこに行つてたんですか？」私が再度尋ねる。

「ああ、調査だよ調査。」仁がさりりと言った。

「調査ですか？」私は思わず訊き返した。

「そ、だから、美弥さんを呼んでくれるかな？」仁が私に言う。

「分かりました。」この流れだと、間違いなく仁は探偵としての仕事をやっと一段落させようとしているのだろう。

そして、美弥さんを連れてくると、

「神内さん、何を始めるんですか？」美弥が訊く。

「“名探偵”の謎解きですよ」仁が、名探偵、の部分強調して言う。

~~~~~謎解き~~~~~

「さて、まずあの事件の真相は、『段々畑で起きた』ということにあるのです。」仁が言う。

「段々畑、ですか？」美弥が訊き返す。

「そうですね、ではまず、あの建物の構造を良く思い出してください。確か、あの物置は、固定されていない。そして、あの日台風が直撃して、ものすごい突風が吹いていた。この二つを足してください。

きつと、小学校2年生ぐらいの足し算ができればこの問題は解けますよ。」仁が訳の解らない事を言っている。しかし、私も美弥さんも、仁が言わんとしていることは分かった。

「つまり、あの小屋は・・・段々畑から飛ばされた？」美弥が言う。

「おいしい！ちよつと違う。実際には、段々畑を、一段だけ転がり落ちたんですよ。」仁が言う。

「つまり、小屋が強風に吹かれて、傾き、そのまま風で転がってしまふ。そして一段下に落ちてしまった。そして中にいた篠田さんは、きつとナイフを持っていたんでしよう、その手に持っていたナイフが、転がる小屋の中で刺さってしまったんでしよう。」仁が言った。「じゃあ、あれは事故だったんですね。」美弥が言う。

「そうですね、間違いなく不慮の事故です。篠田さんには避ける手立てはなかったのですから。」仁がそう言って、謎解きは終わった。と、そのとき、

「篠田さんが意識を取り戻しました。面会なさいますか？」早野香先生が声をかけた。

「もちろん、」私たちは揃って答えた。

そしてICUに入って、仁の謎解きを聞かせると、
「神内さんの言う通りです。何が起きたか分からず、気が付いたら病院にいるじゃないですか。」篠田が言う。

「そうですね、では私たちはこれで、お大事に。」私はそう言って、仁と一緒にICUを出た。

「いい気使いだね。君にしては上出来だ。」仁が褒める。

「積もる話もあるでしょうからね。」私が言う。

「ま、そうだね。」仁が言った。
そして私たちは病院を出た。

「少し調べてみて分かったんだけど、A大学の実験室には、あんな薬物は無いみたいだよ。だから、あの電話は、その事実がばれないようにだれかが裏に手を回したってことだね。外から持ち込んだなんてことが分かったら大変なことが起こるからね。」仁が言う。

「ということは、あれは事故じゃなくて、誰かが故意に篠田さんを薬物中毒にしたってことですか？」私が確認する。

「ああ、しっかり調べないと、クライアントが納得して初めて、俺等の仕事は成功したことになるんだ。」仁が言う。

「そうですね。となると、いつ頃から調査ですか？」私が訊くと、
「そ〜だね〜、まあ篠田さんが退院してからだね。」仁が言う。
「確かにそのほうが皆時間は取れますね。」私は言った。

「とにかく、A大学の調査と、犯人探しが残ってるんだからな。」
仁が言う。

「はい」私は素直に答えた。

そうして、この複雑な事件の幕は半分だけ閉じた。私たちはその後A大学を調査することになったのだが、それはまた次の作品で。

> つづく <

神内 仁の推理小説第1話（後書き）

まだまだ至らないところもありますが、これからもよろしくお願
い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0427d/>

山村での惨劇

2010年10月10日01時05分発行